

位置決定に伴うランドマークの成立過程

- 日本標準子午線を例として -

津 川 康 雄

The Process of Establishing Recognizable Landmarks
— In Case of Japan Standard Meridian —

Yasuo TSUGAWA

Summary

We are able to precisely identify positions by their respective latitude and longitude coordinates. Regarding time, each country determines noon relative to a geographic location when the sun is positioned directly above the standard meridian on the basis of the Greenwich Mean Time as the prime meridian. That is, time at locations on earth is fixed not only by the characteristic of the earth but also by intentionally derived artificial factors. Especially the establishment of time by artificial factors has had a great influence on human life and the recognition of time space throughout our history.

This article examines the process of landmarks established at a certain places upon which the attached level of significance is caused by a human intentions based on various activities. As time passes various contributing factors take effect from which a place or position is either inevitably or accidentally recognized as a result. Symbolic monuments and landmarks tend to be formed at such places or locations where has a significance. Japan standard meridian is provided here as an example. Also examined, is how the axis of spatial recognition was formed through the 5 cities and 11 towns in Hyogo and Kyoto prefecture, and how such was established as a clear standard. In addition, consideration is directed towards the process entailed in the establishment of landmarks from the

viewpoint of creating a pleasant district or town.

In summary, it is very clear that Japan standard meridian was established after the establishment of the prime meridian in England. At present the term ‘Akashi’ refers to Japan standard time, though it had not been documented from its beginnings. It owes much to the existence and efforts of visionary people and the establishment of the astronomical science museum. In other words, landmarks have a contributing influence towards forming the image and atmosphere of a particular district.

- I. はじめに
- II. 本初子午線の成立過程と日本標準時
 - a. 本初子午線の成立と東経 135°
 - b. 標準子午線と明石
 - c. 日本の中心地点と西脇との関係
- III. 標準子午線の通過と地域の関わり
 - a. モニュメント設置の概要
 - b. 標準子午線通過とまちづくり
 - c. 標準子午線と地域連携
- IV. 標準子午線とランドマーク
- V. おわりに

I. はじめに

地球が地軸を中心に1日1回自転し、太陽の周りを1年1回公転していることは、地球上において様々な自然現象を生み出し、我々の行動や時間認識を規定する基本ともなっている。また、回転楕円体である地球には必然的に生じる基準点・基準線や、人間の諸活動に規定され、何らかの意味が付加された空間的位置を見いだすことができる。例えば、地軸は北極と南極を結ぶ軸であり、公転軌道面に対して $23^{\circ}27'$ 傾いていることから、赤道や南北回帰線がそれぞれ、 0° 、北緯・南緯 $23^{\circ}27'$ の緯線と一致し、緯度は赤道から南北 90° の範囲内で位置の確認が可能となる。赤道からの隔たりは太陽エネルギーの受容量の差となり、気候形成に大きく作用している。これに対して、両極を結ぶ大円は経線と呼ばれ、十二支の北を指す子、南を示す午から子午線と表現されることも多い。その中でも、イギリスの旧グリニッジ天文台を通過する経線を本初子午線と呼び、これを基準に地球表面において東西 180° の経度や日付変更線が決定されている。

このように、地球上では緯度・経度による座標点によって物理的位置を確認でき、時間は本初子午線のグリニッジ標準時（GMT...Greenwich Mean Time）を基準に、各国が標準子午線の真

上に太陽がきた時刻（南中時刻）を正午に決め標準時とする例が多い。すなわち、地球上の時空間は地球そのものの特性から規定される部分や、何らかの人為的意図から設定されたものが存在するのである。特に、後者の人為的意図による時空間の設定は、歴史的経緯の中で決定され、人々の生活や時空間認識に大きな影響を及ぼしている。

他方、我々の空間的な行動・活動を支え、位置を明確化するために空間的なアクセントとして、シンボリックな構造物やランドマークが配置されてきた^{1・2・3)}。ランドマークの基本的な特性は地理的空間における自然的・人文的景観構成要素であり、象徴性・記号性・場所性・認知性などの諸特性によって支えられ、人々の空間的座標軸に象徴的に位置づけられる存在である^{4・5・6・7・8)}。

本稿では、人間の諸活動に基づき、人為的意図によって空間に何らかの意味が生じた地点とランドマークの成立過程を考察することにした。そこには、時間の経過やその間に様々な意思決定がなされ、必然・偶然の所産のもとで、結果的に空間認識を行う際の重要な場（地点）が形成されると考えられるのである。こうした意味のある場（地点）に、シンボリックなモニュメントやランドマークが配される傾向が認められる。そこで、一例として日本標準子午線を取り上げ、それが通過する兵庫県・京都府の5市11町を中心に空間的認識軸がいかに形成され、明瞭な基準点が生じたのか、また、ランドマークが配置されてきた経緯や地域づくり・まちづくりとの関係について考察することにした。

II. 本初子午線の成立過程と日本標準時⁹⁾

a. 本初子午線の成立と東経 135°

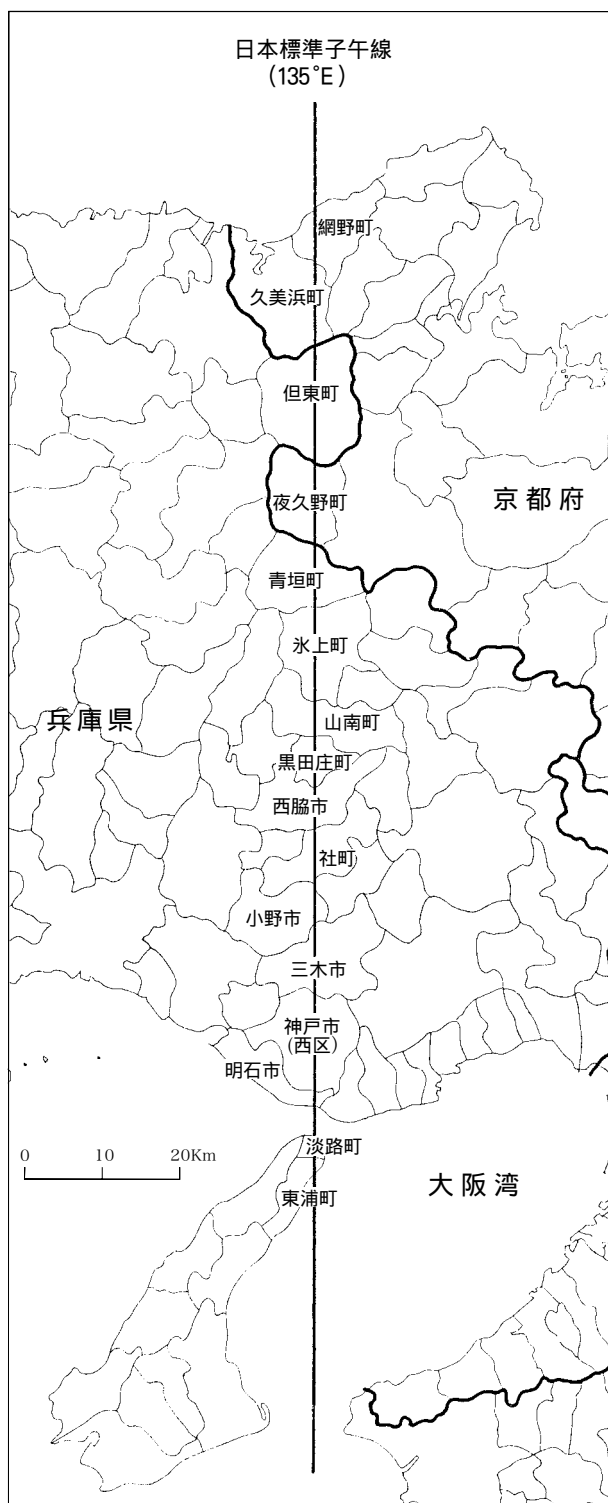
イギリスの旧グリニッジ天文台を通る子午線が本初子午線として設定されたのは 1884（明治 17）年であり、アメリカ合衆国のワシントンで開催された「本初子午線並計時法万国公会」の決議にもとづいている。その背景は、19 世紀になり欧米を中心に交通機関の発達が進み、時刻の標準化が強く求められたからである。その結果、経度が本初子午線より東西 180° まで設定され、両者の境には日付変更線がほぼ直線的に設けられた。また、地球が一周 360° を約 24 時間で 1 回転することから 15° 毎の経線が 1 時間の時差を示す標準子午線となり、各国の時刻設定が可能となった。もちろん、アメリカ合衆国やロシアのように、国土が東西に幅広い国では複数の標準時を用いているし、国によっては夏季の前後、標準時を 1 時間早めたサマータイム（夏時間）を採用する国もある。

日本標準時が制定されたのは、明治 19（1886）年で、勅令「本初子午線経度計算方及標準時ノ件」の発布にもとづいている。そこでは、イギリスのグリニッジ天文台を通過する子午線を本初子午線とし、経度の設定（東西 180°）、明治 21 年 1 月 1 日より東経 135° の子午線を日本の標準時として設定することなどが記載されている。言い換えれば、この時点において、東経 135° 上に位置する市町村等の名称・地名は全く記載されていない。あくまでも東経 135° の子午線（経線）

をもって標準子午線とし、その経線が二次的に日本列島を縦断することが確認されたにすぎなかったのである。なお、当時の社会情勢においては交通網の整備も密ではなく、標準時の必要性もさほど切実なものではなかったであろう。いずれにしても、明治 21 (1888) 年 1 月 1 日午前 0 時 0 分に日本標準時の使用が始まり、それ以後百数十年の時間が刻まれてきた。

b. 標準子午線と明石¹⁰⁾

東経 135° の標準子午線は兵庫県と京都府に位置する 5 市 11 町を通過している (2001 年 9 月現在) (第 1 図)。各市町はそれぞれこの経線を認識し、市町内でモニュメントや施設を設置・建設するなどして、まちづくりや地域づくりに生かしている。その中でも兵庫県の明石市は“時のふるさと明石”として広く知られ、日本の標準時は明石市を通過する東経 135° と表現されることが多い。しかし、先にも述べたように、明治期に発布された勅令には東経 135° の子午線を日本の標準時とすることしか記載されていない。今日のように明石と日本標準時がイコール・イメージとして定着したのは、他の市町に先駆けて日本標準子午線 (以下、標準子午線と略す) の通過を視覚化するなど、先人達の果たした役割が大きい。それは、標準子午線の重要性を認識し、標準子午線通過地点に石の標識を建てたことに始まった (前掲註 9)。



第 1 図 日本標準子午線の通過市町



写真1 標準子午線標石柱
(明石市天文町2丁目)



写真2 標準子午線標石柱 (神戸市西区平野町黒田)



写真3 市立天文科学館 (兵庫県明石市)

具体的には、明治43(1910)年に明石郡小学校長会の人々が教育勅語発布20周年記念事業の一環として、相生町の国道筋(現:明石市天文町2丁目)(写真1)と、平野村黒田(現:神戸市

西区平野町黒田)の県道脇の2カ所に建てた(写真2)¹¹⁾。標識の建設費は郡内の小学校の教員が給料の一部を負担したとされ、明治政府による標準時制定後、20数年を経過した後、初めて可視的な形となって東経135°の標準子午線が多くの人々に認識され、位置づけられたことになる。標石柱が2地点に設けられた理由は定かではないが、両者を結ぶ線と標準子午線を一致させることにより、線の認識をより明確にする意図があったものと推察される。

その後、地図原点の修正などがあり、標準子午線の位置が地図上で移動したりしたため、昭和3(1928)年に明石市教育会は県立明石中学校の山内佐太郎¹²⁾の提唱により、昭和天皇御大典記念事業として子午線標識を正確な位置に建て替える計画をたてた。その際、京都大学地球物理学教室の野満隆治博士に委嘱し、同氏は天文測量にもとづく天文学経度により標準子午線の位置を決定した。計測の結果、先の相生町の標識が103m西にズレていることが判明し、それを相生町巡査駐在所前に移動した。天体観測は同年7月下旬から約1ヶ月間、明石中学校(現:県立明石高等学校)の校庭で行われた。この事業の意義は、地図上の標準子午線の位置決定ではなく、天文測量による位置決定が実施されたことで、ほぼ正確な標準子午線位置を確定できたことにある。その作業は

他の市町に先駆けて明石市で行われ、これにより、既成事実として子午線のまち明石がより明確化されたものと考えられる。その後、この線が市内の人丸山月照寺の境内を通過することから「トンボの子午線標識」が建てられた¹³⁾。昭和26年には戦禍を受けた子午線標識の復旧の機運が盛り上がり、再観測の後、昭和31(1956)年にトンボの標識が移設されるなど、明石市と標準子午線との関係はより密接なものとなっていった。

このように、明石市においては数度に及び測量の実施により、標準子午線に対する市民の認識が深まるとともに、標識等の設置により、標準子午線通過のまちとしての認知度が高まったものと考えられる。しかし、単に標識の設置や広報活動によって明石がそのようなイメージを獲得できたとは思えない。明石市が標準子午線通過都市であることを広く内外に認知されるきっかけになったのは、昭和35(1960)年に建設された市立天文科学館の果たした役割が大きい。当初は国立天文博物館誘致の構想を進める予定であったが、文部省との折り合いがつかず、市立の天文科学館建設へと形を変えた。建設場所を標準子午線上に設定し、展望塔が子午線標識を兼ねたことで、ランドマークとしての要件を最大限満たすものとなった。ちなみに、この展望塔には大時計と共に日本標準時を示す、J.S.T.M.(Japan Standard Time Meridian)の標識が取り付けられている。このように、市民のみならず、鉄道の車窓からも眺めることのできる同館は、展望塔に取り付けられた大時計とともに明石のシンボルとなっていった(写真3)¹⁴⁾。平成7(1995)年に起こった兵庫県南部地震によって大被害を受けた同館であったが、その後いち早く修復され、同10(1998)年にリニューアルオープンしたことは、その重要性を示すものである。このように、明石においては先人の知恵と努力が結実し、2つの石柱設置から始まった標準子午線への関わりが、天文科学館というランドマークの建設へと繋がり、“ときのまち”としての確固たるイメージが作り上げられたものと考えられる。もちろん、単にランドマークとなるモニュメントや施設を造ることだけではなく、折に触れ数々のイベントを催すことにより「時のふるさと明石」が広く内外の人々に認知されていった。

c. 日本の中心地点と西脇との関係

日本の中心地点を経緯度で確認することは難しい。それは、日本の国家領域が領土問題等によって必ずしも明確になっておらず、細長い日本列島の形状からも地理的中心を設定しにくいためである。そのため、日本各地に日本の中心を主張する自治体が数多く存在し、それぞれが独自の理由を提示している。現在では「へそのまち」の宣言を行った自治体が集まり、「へそのまちサミット」などが行われ、各種のイベントを通じた交流が図られている¹⁵⁾。その中であって、早くから日本の中心地点としてまちづくりに取り組んできたのが、兵庫県の西脇市である。西脇市は東経135°の日本標準子午線と北緯35°の緯線が交差する地点であり、日本人の居住する範囲として、北は北緯46°付近の宗谷海峡から南は沖縄県八重山諸島波照間島の北緯24°、東は千島列島択捉島の東経147°から西は沖縄県八重山諸島与那国島の123°と設定すると、その中心位置にあたってい



写真4 経緯度交差点
(兵庫県西脇市)

ることから、同市は日本の中心をアピールし、「日本のへそ」を称することになった¹⁶⁾。

厳密な定義は別として、その経緯についてみると、明石と同様に空間的座標軸の認識が先人の知恵によって行われ、それを守り育ててきた人々の存在がある。そのきっかけとなったのが、大正8(1919)年8月に多可郡内の小学校数学研修会に講師として招かれた東京高等師範学校附属小学校の肥後盛熊氏の指摘であった¹⁷⁾。同氏は明治20年代に西脇、多可郡地域の測量が終了し作製されていた5万分の1地形図を読図していたと考えられ、地図上で経緯度交差点を指摘したのであろう。この話に驚いた地元の人達が、大正11年多可郡教育委員会50周年記念事業として、「東経百三十五度北緯三十五度交叉点海拔六十三米標識」を建てることを決定した。そして、大正12年、陸軍の陸地測量部によって派遣された技師によって、正確な位置決定が行われ、翌13年に竣工式

が挙行された。経緯度標には、時の呉鎮守府司令長官鈴木貫太郎海軍大将(後に首相)が揮毫しており、標識の権威が高まった(写真4)。その後、この地を訪れる人も多くなり、道案内に音を上げた村人がお金を出し合い道標を建てたとされる。

その後、長らく忘れられた存在であったが、同市は昭和52(1977)年の市政施行25周年に取組んだ「みなおそうふるさと運動」を契機に、日本のへそをアピールすることになった。翌年、建設省(現:国土交通省)国土地理院に経緯度交差点の再計測を依頼し、シンボルマークを制定するなど認知度を高める努力が積み重ねられた。さらに、平成2(1990)年には人工衛星を用いたGPS測量による135°E、35°Nの交差点を決定し、「平成のへそ」として位置づけている。

いずれにしても、偶然の所産ともいふべき経緯度交差点に日本の中心点としての意味を見出し、積極的にまちづくりに結びつけ、様々なイベントを開催するとともにランドマークとなる標識や施設を築き上げてきたことは、関係者及び住民の努力の結果とは言え、空間的位置とランドマークとの関係がいかに密接なものであるかを示している。

III. 標準子午線の通過と地域の関わり

a. モニュメント設置の概要

モニュメントの設置主体は自治体(兵庫県東浦町、小野市、社町、黒田庄町、山南町、青垣町、但東町、京都府網野町)、教育会・教員(明石市)、在郷軍人会(三木市久留美)、青年団(三木市大

塚)、商工会(氷上町)、青年会議所(明石市)、ライオンズクラブ(三木市福井)などである。基本的には公的機関や各種の団体組織がほとんどである。標準子午線上におけるモニュメントの設置は正確な位置決定が求められることから、公的な機関や団体が関与することが多くなったものと考えられる。モニュメント設置による住民意識の喚起がその背景にあるものと言えよう。設置時期は明治43(1910)年に明石郡小学校長会の人々が教育勅語発布20周年記念事業として建てた石柱に端を発し、大正、昭和の各時期に及んでいる。モニュメント設置の理由やきっかけは各種記念事業と関連するものが多く、「教育勅語発布20周年記念事業(明石市)」「日本標準時制定百周年記念(東浦町、小野市)」「青年会議所25周年記念(明石市)」「三木ライオンズクラブ10周年記念」「平成元年ふるさと創生事業(黒田庄町)」「山南町合



写真5 子午線モニュメント(兵庫県黒田庄町)



写真6 日本中央標準時子午線最北の塔(京都府網野町)

併15周年記念事業(山南町)」などに代表される。モニュメントの設置により、組織の存在や活動の記録を後世に伝える意図が読み取れる。特に、日本標準時制定百周年時には、「東経135度上市町交流協議会」が組織され、イベントが開催されたり、記念公園が整備されたりした。また、いくつかの自治体では、平成元年の「ふるさと創生事業」の一環としてモニュメントを設置するなど、標準子午線の認識を高める努力が積み重ねられている。すなわち、視角的要素の少ない標準子午線に対して、視角要素そのもののモニュメントを設置することで人々の注意を引き寄せ、ふるさとのシンボルとして認識させる意図もあろう。例えば、兵庫県黒田庄町のモニュメントは周辺の桜と一体化し、ライトアップされることによって地域のシンボルとしての機能も果たしている(写真5)。

モニュメントの設置位置に関しては、大半が標準子午線と主要国道・県道とが交差する地点に設置されている。例えば、京都府夜久野町では町役場が、ほぼ標準子午線上に位置するため、役場の前にモニュメントが設置されている。その前の道路が国道9号線であり、行き交う人々や車のランドサイン、ランドマークとして認知されているものと言えよう。モニュメントの形態・材質は、ほ

位置決定に伴うランドマークの成立過程

第1表 モニュメント・施設等の概要

網野町（京都府）	日本中央標準時子午線最北の塔（磯）、日本中央標準時子午線塔（引原峠）
久美浜町（ " ）	
但東町（兵庫県）	子午線塔、子午線公園（モニュメント日時計「太陽の道」）（中山） 子午線標識（栗尾）
夜久野町（京都府）	子午線塔（「日本中央標準時」、夜久野町額田...夜久野町役場前）
青垣町（兵庫県）	子午線標塔（「E135° 子午線通過点」）（小倉）
氷上町（ " ）	子午線標石塔（「子午線の通る町氷上町」）
山南町（ " ）	子午線標石柱（山南町合併十五周年記念事業）、日時計（野坂）
黒田庄町（ " ）	子午線モニュメント（平成元年ふるさと創生事業）
西脇市（ " ）	子午線標石柱「日本のへそ（経緯度交差点）、日本へそ公園、にしわき経緯度地球科学館（テラドーム）、日本のへそモニュメント（GPS測量）
社町（ " ）	子午線標石柱（「日本中央標準子午線」）（上三草）
小野市（ " ）	子午線標石柱（「日本中央標準子午線」）、小野子午線公園（モニュメント日時計）
三木市（ " ）	子午線標石柱（「大日本中央標準子午線」）（久留美）、子午線標石柱「大日本中央標準子午線」（大塚）、子午線標塔（「標準子午線表示塔」）（福井）
神戸市（西区）（ " ）	子午線標石柱（「大日本中央標準時子午線通過地識標」）（平野町黒田）
明石市（ " ）	子午線標石柱（「大日本中央標準時子午線通過地識標」（天文町2丁目）、子午線標示柱（トンボの子午線標識）（人丸山）、市立明石天文科学館（大時計）
淡路町（ " ）	子午線モニュメント「子午線の通る町」（岩屋）
東浦町（ " ）	子午線モニュメント（日本最南端）（小磯）

現地調査及び各市町の資料等により作成（「」内の記載は標石柱等に記載された文など）

ほとんどが石（柱）であり、金属製の塔も多い。デザインは多様だが、標準子午線のもつ本質が表現され、地球・時・方位などがモチーフとなったものが多い「地球...{東浦町、明石市、三木市（福井）、黒田庄町、氷上町、青垣町、京都府夜久野町、網野町}」、「時（時計）...{明石市（天文科学館）、但東町、網野町}」、「方位（矢や動物を用いて南北の方向を示す）...明石市、三木市、氷上町、青垣町、夜久野町、但東町」。なお、小野市や但東町には子午線公園が設けられ、そこにモニュメントとしてデザイン化された日時計が置かれている。京都府網野町では子午線公園内に日本標準時子午線最北の塔が設置され、日本標準時と世界標準時がデジタル時計で表示されている（写真6）（第1表）。

b. 標準子午線通過とまちづくり

先にも述べたように、現在、標準子午線は兵庫県・京都府の5市11町を通過している。その結果、各市町それぞれにこの線を位置づけ、関わりを模索し、まちづくりに生かしている。全体に共通するイメージは「時間（とき）」である。そこで、各市町が用いているキャッチフレーズを見ると、明石市「時のふるさと明石」「時間厳守宣言都市明石」、西脇市「日本のへそ／東経135度・北緯35度が交差するまち」、網野町「子午線の通るまち網野町」などとなり、5市11町の中で標準子午線をキャッチフレーズに取り入れて積極的にアピールするものはさほど多くはない。

第2表 西脇市の「日本のへそ」への取り組み

大正8年8月	多可郡加美町金蔵山で多可郡小学校教師数学研修会開催。講師の東京高等師範学校附属小学校・肥後盛熊氏が「経緯度交差点が日本の中心、それが西脇」と指摘。
大正11年	多可郡教育委員会が50周年記念事業として、経緯度交差点標識の建立を決定。
大正12年	東経135度・北緯35度交差点の「大正大測量」
大正13年1月	経緯度交差点標識建立竣工式を比延第一小学校で挙行。
昭和52年	西脇市制25周年記念「みなおそうふるさと運動」を展開。
昭和53年2月	建設省国土地理院に経緯度交差点の再計測を依頼。
昭和53年3月	経緯度標周辺整備完工式。日本のへそシンボルマーク制定。
昭和53年10月	北海道のへそとしてアピールする富良野市と友好都市親善提携。
昭和53年12月	日本のへそ子午線マラソン大会が始まる。
昭和58年1月	岡之山公園の区域を拡大。都市計画公園「日本へそ公園」に改称。
昭和60年7月	日本のへそ公園駅開業。
昭和62年8月	へそまつり始まる。
平成2年3月	「日本のへそです大作戦」イベント開催。平成の大測量。
平成5年6月	「テラ・ドーム」オープン。
平成6年4月	GPS測量で測定したもう一つのへそ地点に、日本のへそモニュメントが完成。
平成9年11月	全国へそのまちサミット西脇大会の開催。

(西脇市のパンフレットより抜粋)

しかし、その中で明石市は標準子午線通過をまちづくりやイベント開催へと結びつけ、イメージの定着化を積極的に図ってきた。同市は、明治43年以後、子午線標識や時、宇宙に関するモニュメントを市内各所に設置するとともに、天文科学館を開設した。また、標準子午線制定から区切りとなる75周年、100周年に大々的に記念式典を開催している。特に、100周年記念（昭和61年）には“あかし子午線まつり”として、約8ヶ月に及ぶ各種イベントを東経135度線上市町交流協議会の後援のもとで開催した。その趣旨には、(1) まちの活性化、(2) ふるさとの意識高揚と市民連帯感の醸成、(3) 明石のイメージアップと商業観光の振興などが掲げられている¹⁸⁾。その他、昭和35（1960）年6月10日に市立天文科学館の開館と時の記念日制定40周年を記念して「第1回子午継走大会」が開催された。さらに、市内の小・中学校には様々なデザインの水平時計が設置され、教育の場で「時のふるさと明石」を周知している。まちづくりの根幹に標準子午線が据えられ、それに関連する各種事業やイベント開催がまちづくりに直結する姿が浮かび上がる。ちなみに、市内の約7000個のマンホールのはたには、天文科学館と135°Eの子午線が描かれ、正確に南北に置かれるため、街の方角表示板も兼ねている（前掲註9）。

西脇市も“日本のへそ”をキャッチフレーズにまちづくりに取り組んでいる（第2表）。経緯度交差点の認識が標識の設置に結びついたが、長らく放置されたままになっていた。そこで、昭和52年の西脇市制25周年記念の「みなおそうふるさと運動」の一環として、経緯度交差点の再測量及び経緯度標周辺の整備を行った。その後は積極的にまちづくりとの連携をはかりながら、シンボルマークの制定、北海道の富良野市との友好都市親善提携、子午線へそマラソンの開催、日本へそ

位置決定に伴うランドマークの成立過程

公園の整備など、官民一体となったイメージアップを図った。特に、「日本へそ公園」はそれまでの岡之山公園の区域を拡大し、都市計画公園として整備することとし、そのデザインを同市出身のイラストレーター・画家として知られる横尾忠則氏に依頼した。また、経緯度標に近接し、加古川に架かる橋梁を「緯度橋」と命名するなど、経緯度交差をまちづくりに積極的に反映させている。西脇市は「播州織り」で知られる織物のまちでもあり、例年5月に「織物まつり」を開催していたが、昭和62年から毎年8月に行われている「へそまつり」と統合し、市をあげた祭りとして位置づけている。平成元（1989）年に、ふるさとづくり市民会議はふるさと創生事業の一環として、「日本のへそです大作戦」と命名された新たな事業展開を行った。平成5年に開設された西脇経緯度地球科学館は「テラ・ドーム」と命名され、日本へそ公園の中心施設として位置づけられている。また、まちづくりにおけるハード面の整備とともに、ソフト面での強化も図り、各種のへそに関連する土産物品を生み出す努力を積み重ねている。

その他、兵庫県は黒田庄町に「東はりま日時計の丘公園」を設けている。そのコンセプトは「子午線=時」であり、レジャー施設と共に各種の日時計を配置している。

c. 標準子午線と地域連携

標準子午線通過の5市11町は、昭和61（1986）年の日本標準時制定100周年を契機に、「東経135度線上市町交流協議会」を組織し、文化・産業の交流を深め、活力ある地域づくりを進めている。各種の交流を通じて連携が図られており、同年7月小野市に造られた小野子午線公園には日時計の周りに5市11町の市町木が植えられている。同様に但東町にも同年11月に子午線制定100周年を記念して子午線公園が造られ、周囲に標準子午線通過市町の16本の市町木が植樹されている。また、西脇市では昭和53（1978）年から毎年12月に行われる「子午線マラソン」に各市町の中学生を招待し、交流会を開催している。

西脇市は標準子午線と北緯35°の交差点として「日本のへそ」を自認している。そのため、昭和53（1978）年に「北海道のへそ」をアピールする富良野市と友好都市親善協定を結んだ。それ以後、両市は各種行事への相互参加など人的交流を進めている。その延長上に位置づけられるのが、「全国へそのまち協議会（事務局西脇市）」である。北海道から沖縄県に至る14市町が参加する組織であり、平成9（1997）年から活動を開始している。同市は市制施行45周年の同年11月に「全国へそのまちサミット西脇大会」を開催し、運営のイニシアチブを取っている。その理念は、「へそのまち」という共通の地域資源を持つ各市町が、人、物、文化、情報の交流を通じ、活力に満ちたまちづくりに取り組むことであり、全国に「へそのまち」を発信する意図がある。具体的には「全国へそのまちサミット」を各市町持ち回りでテーマを設定し、祭りの開催などと並行して開催している。ちなみに、群馬県の渋川市もその会員である。

このように、標準子午線は線であり、線上に位置する自治体が子午線を共通の地域資源として認識し、地域連携にまで高められたことは興味深い。

IV. 標準子午線とランドマーク

イギリスの本初子午線決定は、東経 135° の日本標準子午線の設定へと結びつき、世界及び日本の経度が座標線（軸）として認識可能になり、これによって人々は地表面において東西方向の物理的・絶対的位置を確認できるようになった。東経 135° の標準子午線は日本列島を縦断し、本州と淡路島の 5 市 11 町を通過することになった。結果として、標準子午線上に特徴的な地理的位置がもたらされ、京都府網野町には日本列島（本州）最北端、明石市には明石海峡に面する地点に本州最南端、淡路島の淡路町には明石海峡に面する地点に淡路島最北子午線通過地点、同島東浦町には子午線最南端などが位置づけられたのである。このような地点の大半に何らかのモニュメントが設置され、当該地域におけるランドサイン、ランドマークとしての機能を果たしている。このように、一つの決定が波及効果のもとで新たな意味が付加された地点を、標準子午線上に次々と生み出していった。そこに様々な要因が付加されることにより、標準子午線が人々の時空間認識軸として定着していった。標準子午線の視角化が具体化していく過程において、その役割を果たしたのが各種のモニュメントや施設の設置・建設であった。すなわち、東経 135° の標準子午線が保有する時空間認識軸としての機能と、そこに様々な意味と活動を結びつけていった人々の存在が一体化することにより、標準子午線がより明確な日本の時空間認識軸へと高められたものと考えられる。

しかし、標準子午線は社会要因や科学技術の進歩などにより、明確な位置決定に変化を生じたことも事実である。地球上で標準子午線が通過するのは一カ所であるはずだが、測地方法の変化や地図原点の修正により、その位置が異なり、地図上東経 135° の標準子午線の位置が変化してきた。大正 4（1915）年には地図原点の経度に 10.4 秒の修正が加えられたため、東経 135° の標準子午線は約 267m 西にずれることになった（前掲註 9）。近年では、平成 13（2001）年に測量法が改正され、日本の緯度・経度がこれまでの日本測地系から世界測地系に基づいて表示されることになり、東京付近では現行の緯度・経度の値と比較して、緯度で約 +12 秒、経度で -12 秒の差となり、それぞれ約 400m 強の差が生じることになった。したがって、これまで地図（地形図）上の位置によって東経 135° 上のモニュメントなどを設置していた場合、必然的に位置の修正が必要になる。実際、いくつかのモニュメントはその都度位置を変更した経緯もある。とは言え、標準子午線のもつ時空間認識軸としての機能が消え去るわけではない。

このように、何らかの意味が付加され、明確な位置決定がなされた地点には人々の意識が集中し、他とは異なる顕著な地点としての位置づけが行われる。その際、シンボリックなモニュメントやランドマークが配されるのである。標準子午線はその典型例として位置づけることができる。

V. おわりに

これまで述べてきたように、標準子午線の明確な位置決定がなされ、人々の時空間認識軸が形成され、そこにランドサインやランドマークが配されてきたことが明らかになった。また、標準子午線上に位置する各自治体は日本標準子午線を地域活性化の資源・起爆剤として活用していることも明らかになった。さらに、位置決定には時代の流れや科学技術の進歩により紆余曲折があったことも確認できた。言い換えれば、標準子午線は厳密な位置決定と曖昧さが混在する対象であったことも事実である。まして、位置決定が異なる形で行われていたならば、その後の展開が全く異なっていた。すなわち、本初子午線が現在のイギリスのグリニッジではなく、1884（明治17）年に開催された「本初子午線並計時法万国公会」でイギリスに対抗したフランスのパリに決定されていたならば、日本の標準子午線は愛知県の豊橋市付近を通過することになっていたのである。当時の世界情勢のもとでの本初子午線の決定は必然であったのかもしれないが、日本標準時は偶然の所産と言わざるを得ない。しかし、一旦決定された基準線はその後の歴史の中でより明確化されていった。明治政府が近代国家建設に向かって邁進する中で発布した「本初子午線経度計算方及標準時ノ件」の勅令は、標準子午線の意味を決定的なものとした。そこに歴史的・地理的慣性が働いたことを認めざるを得ない。

二つの石柱から始まる標準子午線の視角化は明石市に「ときのまち」というイメージを付加した。しかし、石柱の一つが置かれた平野村黒田は、現在、神戸市西区である。日本標準時は神戸市を通る東経135°と表現しても誤りではない。一時期、明石市に対して神戸市から合併の誘いがあった。世界的には明石市よりも神戸市の方が良く知られており、神戸の名が標準子午線と一体化している方が、世界的な認知度がより高まったのかもしれない。付け加えれば、平成10（1998）年に供用が開始された明石海峡大橋は本州と淡路島を結ぶ本四連絡橋の一つである。この長大な吊り橋は昼夜を問わず衆目を集めるランドマークである。技術的・経済的な問題とは別として、仮にこの橋が標準子午線と一致する線上に建設されていたならば、太陽の南中が橋の位置と一致し、日本標準時とこの橋が一体化することになった。すなわち、ランドマークとして位置づけられる要素をほぼ完璧に備える存在になっていたと考えられる。

いずれにしても、一旦、認知された事柄は継続していくことが多く、先人達の知恵と努力がこのような結果をもたらしたものと言えよう。ランドマークは自然的・人文的諸要素から成り立っているが、偶然の所産から生み出された大きな可能性に気づき、まちづくり・地域づくりに結びつけることができた典型的な例を標準子午線上に認めることができる。言い換えれば、知恵と努力を結集して地域資源を発掘・発見することの重要性が存在する。ランドマークはその役割を担う要素を潜在的に内包しているのである。

（つがわ やすお・高崎経済大学地域政策学部助教授）

〔 註 〕

- 1) リンチ (丹下健三・富田玲子訳)『都市のイメージ』、岩波書店、1968、55～113頁。
- 2) 津川康雄『地表空間におけるランドマークとその意義』、立命館地理学9、1997、17～29頁。
- 3) 津川康雄『空間的位置とランドマークの関係』、地域政策研究3-2、2000、21～33頁。
- 4) 津川康雄『自然的ランドマークとその要件』、地域政策研究2-1・2、1999、117～131頁。
- 5) 津川康雄『京都の観光要素』、立命館地理学5、1993、17～29頁。
- 6) 津川康雄『ランドマークの形成と地理的慣性 - 城郭を中心として -』、高崎経済大学論集39-3、1996、21～42頁。
- 7) 津川康雄『宗教的ランドマークとその要件 - 大観音像を例として -』、立命館地理学10、1998、49～58頁。
- 8) 津川康雄『宗教的ランドマークの成立過程 - 大観音像を例として -』、地域政策研究1-1、1998、87～101頁。
- 9) 明石市立天文科学館『明石市立天文科学館の40年』、2000、全101頁。
- 10) 明石市史編纂委員会『明石市史 現代編I』、明石市、256～258頁、354頁。
- 11) 標識の碑文は「大日本中央標準時子午線通過地識標 (一部旧字)」である。
- 12) 山内佐太郎は昭和5年3月15日発行の『日本中央標準時子午線天測作業並標識再建に就いて(明石市教育會)』に序文を寄せている。それによると、「余が子午線通過地の位置天測の必要を如實に感じたのは、去る大正五年五月十六日渡米した時の事である。天洋丸で横濱出帆以来、毎日約三十分づつ、時計を進めていったが、同廿二日(月曜日)、百八十度子午線を通過した時は、恰も午後三時五十八分であった。然るに其翌日も亦、再び五月廿二日(月曜日)であることを知って、痛切に子午線、標準時といった事柄を考へさせられたのである。その後偶々明石の地に於ける子午線天測の必要並に其の標識新設の事に関して、大阪鐵道局教習所講師松下俊雄氏の熱誠に主唱されたのに勵まされ、素願貫徹の意志やみ難く、遂に昭和御大典記念事業として、明石市教育會に此事を發起した次第である。而して此の生一本の仕事を活かされたのは、野満博士と古宇田校長で、此を助成されたのは本教育會の幹部諸君である。茲に度みて感謝の誠心を捧げずには居られぬ。昭和五年三月明石市教育會長 山内佐太郎識 (一部旧字を筆者修正)」といった内容が記されている。ここでは、同氏が子午線に対する認識を日付変更線を通じた経験から得たことや、偶然の所産であった日本標準子午線の正確な物理的位置確定の必要性を関係各位から提唱されたことが述べられている。その結果、明石市教育會の人々を中心となって一大事業が立ち上がり、明石において天測が行われ、正確な子午線の位置が確定された。これにより、既成事実として“子午線のまち明石”がより明確化されたものと言えよう。
- 13) トンボはあきつと呼ばれ、日本の異名が「あきつ島」に由来する(前掲註9)
- 14) 天文科学館は国土地理院の地形図等で示される東経135°(測地経緯度)による経線ではなく、天体観測によって計測された天文経緯度に基づく東経135°の位置にある。
- 15) 「全国へそのまち協議會」が組織され、「地域間交流」「へそのまちの交流による情報発信と地域への誇りの醸成」「地域資源へそを生かした地域づくり」などを目標としている。「全国へそのまちサミット」などのイベントを通じて活動している。
- 16) 西脇市『市勢要覽(市政施行30周年記念)』、1982、16～23頁。
西脇市『広報「わがまちにしわき(NO.407)」』、1991、6～7頁。
西脇市『日本のへそ(パンフレット)』
- 17) 肥後氏は「私は、前々から一度この地へ来たいと思っていました。この多可郡には、日本の中心にあたる東経135度と北緯35度の交差点があるからです」と話したとされる。また、比延尋常高等小学校校長は郷土讃歌を、「計る中央標準時 東経百と三十五 又帝国のほぼ半ば通ずる北緯三十五度 わが日本中心に 占むるは わが郷土」と作詞した。生徒並びに住民に対する啓蒙に一役買ったものと考えられる。
- 18) 明石市企画部企画課『日本標準時制定100周年記念'86あかし子午線まつり(報告書)』、1987、全18頁。

付記) この研究をまとめるにあたり、1999年度高崎経済大学特別研究奨励金『ランドマークの諸要件に関する地理学的研究(研究代表者 津川康雄)』の一部を使用した。資料収集にあたり、明石市立天文科学館学芸員の井上毅先生、西脇市役所企画行政部総合企画課の戸田雅人様ほか関係市町の皆様にご配慮をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。なお、本稿中の写真1～6は筆者の撮影による。